

“祖父江の虫送り”を通して 文化や地域を引き継ぐ



杏和高校 地域研究グループ

熊沢 咲良 小出 来捺 木村 心優 近藤 夢子 塩田 茉莉 鈴木 柚香
田島 奈実 遠山 美樹 野田 詩織 林 すみれ 松坂 穂乃香 山下 歩華
秋葉大輝 三津原 やまと 磯野 晃希 瀧波 愛翔 橋本 隆良 横井 純

はじめに

私たちの愛知県立杏和高校は愛知県稲沢市の旧祖父江町にある。「祖父江の虫送り」はそこで行われ、愛知県の無形民俗文化財になっている。

虫送りは初夏に、稲の害虫を村から駆除し追い出すために全国的に行われてきた行事である。形はいろいろあるが、斎藤実盛人形をつくり松明で行列を行い村境まで虫を追い出す地域も多い。しかし、農薬の普及や都市化が進む中で多くの地域でその行事はなくなっていった。愛知県内も多くの地区で行われていたが、大々的に行われているのはほんのわずかである。その一つが、私たちの地域に残された「祖父江の虫送り」である。

6年前から杏和高校はこの伝統行事に参加し、調査を行うとともに、何名かの生徒が参加し行事の担い手として大きな役割を果たすようになってきた。

去年多くの先輩が情報発信することで、地域活性化の活動を行った。2月に行われた本校独自の発表会である「総合学科発表会」でも、その取り組みを発表した。地域とつながることの楽しさと大切さを訴えていた。その場で「虫送りに参加し私たちに意思を引き継いでほしい」と強調していた。今年も十数名がその取り組みを引き継いでいくことを決意した。何人かは初めての虫送りで手探りの活動だが地域とつながりを求めて活動をしようと考えている。

今回の論文は先輩たちが昨年やってきた成果と、今年私たちが5月からやり始めたこと、およびこれからかやる予定のことからなっている。活動を開始して十分な活動ができていないことと、虫送りという行事が行われる前にこの論文の提出締め切りがあるため今年部分は不十分な形だ。

昨年の活動に関しては先輩たちが「昨年の田舎力甲子園」以降の活動を書きおいたレポートをそのまま掲載することにする。なのでこれは先輩と私たちと私たちの2年間にわたる合同の作品である。

わたしたちの今回の研究は2部からなる。以下のとおりである。

I部 2018年の活動

- ・2018年の虫送り 当日レポート
- ・他の虫送りとの比較 愛知県常滑の調査
- ・情報宣伝活動
- ・祖父江の虫送り ATOZ の作成

II部 2019年の活動

- ・他の虫送りとの比較 三重県熊野市
- ・情報活動
- ・今後の予定
- ・まとめにかえて

I 部

2018 年度の活動
(昨年の田舎力甲子園以降の活動)

1.2018年の祖父江の虫送り

1) 人形・松明作り 日時は7月7日(土曜日) 場所稲沢市立牧川小学校 14:00~17:00



朝は曇りだったが、作業が始まる頃には雨がひどくなり虫送りが行われるのか不安になった。

1体だけ作るのに時間的に余裕があり14:00から始まった(2017年は虫送り用と郷土資料館用の2体作ったので13:00スタートだった)。実盛人形は全員で組み立てていくのではなく、「手足班」、「頭班」、「ウマ班」など、部位に合わせて分かれて作り、それぞれが出来上がったところで集めて合体させた。馬は稲ワラ、小麦ワラ、細縄、サツマイモ、ナスを使い、実盛人形は小麦ワラ、ハカマくず、稲ワラ細縄を使い作られる。これも例年と一緒だ。

まずは、麦の袴をとる作業。今年の麦はちゃんと麦畑を近くで確保できたらしい。去年は長さが短く人形を作るのに苦労していた。会長さんは「今年はきちんとした麦だから大丈夫」とおっしゃっていた。一方雨でぬれて少し黒くなっていたのは残念だった。



藁のはかまを取る作業はとても細かく、量も多いため結構大変だが、いろんな人たちとお話をしながら作業をすることで、気も紛れ、時間を忘れて楽しく行うことができた。特に一部のメンバーは昨年と同じ人の隣に座りますます仲良くなることができ、LINE を交換などしていた。

おじさんたちが笑わせてくれたので、疲れなかった。おじさんと将来の夢や、大学の話をした。おじさんの中には小さなことでもほめてくださる方がいて、うれしかったし、よく見ていてくださるなどびっくりした。

あと今回大きな変化があった。子どもの参加がとても多かった。自分たち高校生も今回は人形づくりの1部に参加したのは23人。ほとんどが3年生で部活動を引退したために人形づくりから参加することができ昨年の2倍である。地域研究の13人以外にも「おもしろそうだから」と10人ほどが参加してくれた。小学生も中学生も例年と比べて格段に多く感じた。



実盛の手綱づくりは稲の苗を使って行った。苗をみつあみで編んでいった。この部位は去年は高校生が一人も参加していないらしく、私たちが来たことがうれしかったそうだ。「(この作業を) 引き継いで行ってほしいなあ」と言われ思わず「是非!!」と返事をしてしまった。編みこむだけで簡単だったので来年は小中学生も積極的に参加してほしいと思う。たわいもない話をしながら編み込む作業はとても面白かった。

馬の手足をつける作業もやらせてもらった。去年はひたすら袴取りをしていたけど、ひもを結ばせてくれたのはうれしかった。一方、はやくやったらゆっくりやれと怒られるし、ゆっくりやれば早く足を完成させないとちょっとどいてと言われ、どうしていいのかよくわからなかった。馬の足を作る際に、滑らないようにするため太い紐に結び目を作り、それを束ねた藁の中に入れていた。馬の足と体を合体させるときに、細い紐でたすきをかけるように斜めに結んでいた。また、頑丈にするために何重にも結んでいた。結び方を覚えるのはとても難しく、何回もやってみないとなかなか覚えられないが、教える方もとても難しいと感じた。



実盛人形の胴体作りはほかの場所に比べて複雑なので去年は昔から虫送りに参加している地元の人たち中心で作っていたのだが、今年の胴体作りは始めて胴体を作る人たちや虫送り自体始めて参加する人たちによって作られていた。部分を作る時は全員で役割分担をしてスムーズに作れるような体制で作業を進めていた。

実際に組み立てる時にもその場の地元の人が「頭は体を藁で巻いてからさしてははずだ。」と言う人と「いや、頭はさしながら巻くんだ。」と作り方をああでもないこうでもない手探りで作っているような感じがあった。実盛人形を立てる時に実際に持ってみて予想をはるかに超える重さに驚いた。大人が三人と高校生一人でようやく何とか動かせるような重さだった。

一番大きな変化があったのは松明作り。



2017年は袴取りと並行して松明作りが行われていたが、今年は袴取りが終わり、人形の部品作りが終わったところで、体育館全体を使って一気に30本ほどの松明づくりがおこなわれた。だから、私たちも全員が松明づくりにかかわることが可能だった。袴取りよりずっと楽しく、行事に参加しているという実感をつよくした。

もう一つの変化は小中学生が例年の倍以上いたために、自分たち以上に子供たちが楽しそうに積極的に松明作りを行っていた。おじいさんほどの人と楽しそうに縄の結び方を教えてもらいながら作業をしていた。小学生と高校生、中学生と高校生の共同作業もたくさんみられた。

結び方が少し複雑で難しかった。しかし、「こうしたら取れないよ」などたくさんのアドバイスをくれた。新聞をまとめるときも有効活用できると聞いたので活用していきたいと思った。たいまつ作り方も教わる人によって、縄を使う人や藁で紐を作って縄代わりにするひと、また、結び方も人によって違っていたので説明を受けてみるのも楽しかった。

一方で、「去年より小中学生が多かったため遠慮してしまい、思い切りできなかった」という声もあった。これは、それだけ小学生が増えて行事としては良い方向に向かっている証拠だと感じた。



最後に会長さんが実盛に服と顔を書き入れ完成。今年の顔はここ数年にないイケメン。みんなから「今年はかっこいい」という声上がる。「今年は違う人が書いたの」という声が上がっていたが、書いているのは去年も今年も会長さんなので、どうしてこれほど違うのかとも思った。

相変わらず外は小雨が降っている。会長さんが言うには虫送りの夜は雨が絶対にふらないらしい。「多分、やむだろう」という期待を込めて。一時解散。夜を待つことになった。



5時に人形づくりが終わって、7時までもらった助六ずしを食べて休憩。外は雨なのでひたすら体育館の中で待つ。一部メンバーは小学生と仲良くなり、じゃれ合って遊ぶ。小学生と遊ぶ機会なんてほとんどない。これも虫送りの御蔭である。

外はどしゃ降りに、とうとう6時50分虫送り行列の中止が決定。体育館内でセレモニーだけが行われ、本日は終了。2時間待つ中止は残念。雨には勝てず仕方がない。虫送り延期はここ10年で初めてのことらしい。



2) 虫送り行事 7月8日(日) 前日の雨天によりこの日に順延

例年なら牧川小学校グラウンドで市長や県議員や市議員のあいさつなどが続くセレモニーを行ってから出発する。しかし、今年は前日夜体育館でセレモニーが行われたため、7時から虫送りが始まった。海田会長が軽トラックの上から挨拶・諸注意行いスタート。例年より15分ほど早く行列が始まった。そのためずいぶん明るいうちにスタートした。下の昨年の写真と比べるとよくわかる。



↑ 昨年



まだまだ明るい中、祖父江と書いた提灯、鐘、太鼓、実盛人形、そのあとを松明が続く。松明は全部で31本。ほぼ例年と同じである。しかし、今年は順延となったために、持ち手が若干足りなかった。私たち杏和高校にはそのうち7本を割り当てられた(去年は4本だったので、一本を5人で交代しながら持った)。私たち自身も日程変更で15人ほどしか来る人のめどが立たなかった。さらに太鼓を持ってほしいという依頼もあり、急遽、近所の友達を呼び出すなどして対応した。結局体格の良い男子二人は太鼓持つという大役をうけた。残ったメンバーで一人もしくは二人で松明を持つことになった。



虫送りの行列が続く、まだまだ空が明るい中でやるのは不思議な気もした。

←急遽太鼓を持つことになった二人



去年の同じ場所明るさが全く違う →



松明を持って歩いているとき、どんどん火が燃え盛っていき、このままでは火が手まで来てしまうのではないかとあせった。途中で消防団の方が水を持ってきて調節してくれた。中にはもう手元まで来てやけど寸前まで来たのもあった。もう下に置くしかなかった。とにかく、二人で持つのは重く、次の日は筋肉痛になるくらいだった。

風向きがひどく煙がひたすら自分のほうに向かってきた。煙たさは半端なかった。行列のゴールが近づくにつれて、やっと暗くなりはじめ、松明の火がきれいに見えるようになって来た。



ようやく暗くなった中、松明を次から次へと炎の中に投げ入れる。最後に鐘・太鼓が鳴る中、実盛人形を炎の中に入れ、昇天させ全員の拍手のうちに豊作を祈る行事は終わる。最後に海田会長が挨拶をされた。

ラストは大きな火の中にみんながたいまつを投げ入れる瞬間を撮っていた。炎はとても大きく、熱く、みんなが汗水たらして作ったものが一瞬にして消えてしまった。最後の実盛人形を投げ入れた後、みんなの拍手があり、とても良い光景だと思った。みんなで作りあげて、統一感のある終わり方。地域ならではの伝統行事であった。

2. 他の虫送りとの比較 愛知県常滑の調査

1) 常滑市矢田の虫送りと祖父江の虫送りの関係

稲沢市祖父江の「虫送り」と常滑市矢田の「虫送り」がセットになって昭和59年に「尾張の虫送り行事」として県指定無形民俗文化財に登録された。二つで初めて無形文化財となっている。



2) 常滑矢田地区と祖父江の虫送りの最大の違い

祖父江の虫送りとの最大の違いは、実盛人形が登場する「ウンカ送り」と松明行列を行う「虫送り」の二つに分かれていることである。

3) ウンカ送り

2018年6月28日（金）

「ウンカ送り」は夕方に行われ、サネモリ人形とフウフの鳥を先頭に、太鼓とほら貝で矢田川のほとりを約30分ほど歩き、五穀豊穡を祈って最後に矢田川に流す神事である。

6月28日に行われた。私たちは期末考査中で現地に行けなかった。右の写真は常滑市のWEB『常滑市ホットニュース2018年6月』から引用している。



このウンカ送りは、皆川さんからもらったアンケート用紙の返事で考察する。

皆川さんからもらった返事によると

サネモリ人形は「麦わらで胴体をつくり、白い紙をまく。紙製の陣羽織・刀・采配をつくり、身につけさせる」でサイズは「120センチ」。フウフ鳥は「麦わらと青竹と紙」でサイズは「200センチ」である。

サネモリ人形は祖父江のものとは全く別物である。その違いが面白い。常滑のものはまるで江戸時代の武士である。



【常滑（公民館に飾ってあったもの）】



【祖父江】

フウフの鳥は祖父江には存在しないものである。皆川さんの返事によると「実在の鳥ではなく、害虫を食べる鳥」らしい。フウフの鳥の羽は、抜いて「家に持ち帰り神棚に飾ってまつる」そうである。

子どもたちが参加するのは「最後にごくろうさまの意味のおやつがあるので」それが目当てではないかとのことだった。



【フウフの鳥（公民館に飾ってあったもの）】

皆川さんは「昔から川に流すことになっているから、実盛人形とフウフ鳥を流すけど、今はすぐに回収するんだ。川を汚すわけにはいかないからね。」と教えてくれた。

4) 虫送り当日の調査

調査日：2018年6月30日

常滑市矢田地区

地域：常滑市矢田地区

参加者：地区の人

中心：地区の区長・副区長・評議員など

やること：神事（八幡社）

出発セレモニー（矢田集落センター）

虫送り行列

私たちが矢田集落センターについたのは6時50分ごろ準備がちやくちやくと進んでいた。壁にはたくさんの松明が並べられていた。祖父江の一回りとかく長い。本数は127本（頑張って数えてみた）すごい迫力だった。祖父江は今年は31本だったので約4倍である。



【ずらっと並ぶ松明】



【大きさの比較 左：常滑 右：祖父江】

早速、皆川さんにあいさつに行った。「遠くからよく来てくれたね」と声をかけてもらった。準備で忙しい中私たちの質問に丁寧に答えてくださった。

この松明は一週間前の土曜日の午前中に、子供が親と一緒に作るらしい。「地区の子はほとんど参加している」「親といっしょにわいわいがやがややって楽しそうに作っている」と説明を受けた。子どもが親と一緒に自分専用の松明を作るのはいいなと思った。「自分で作ったやつだから愛着がわき最後までもとうとする」という皆川さんの言葉は説得力があった。



地区以外の子供にも「わくわく体験教室」というのがあり 20 名が先着でやれるらしく。これも毎年すぐ一杯になるほどの人気だということだった。また、松明をもって「800m」歩くと聞きちょっとびっくりした。



【松明には札がついている そこには個人個人の名前が書かれている】

松明には一つずつ個人名が書かれている。皆川さんが言う「自分の松明」を作っている様子がそこからもわかる。祖父江では、番号は札についているが、作った人と持つ人は無関係である。

時間が近づいてくるとどんどん人が集まってきた。目立つのはヘルメットをかぶった小学生だ。どこも親子連れだ。自分の松明を嬉しそうに持って並んでいる。これこそが、この虫送りの特徴だと思った。また、その人数本数にとにかく圧倒された。



また、この虫送りは中止などが無い伝統行事である。人為的なイベントとして行われているわけではない。

7:00 ごろから近くの八幡社では神事が行われている。憲法の政教分離に関する配慮で、同じ時間に矢田集落センターではセレモニーが行われる。多くの人が松明を手にとりにこれに参加する。セレモニーでは国会議員や県議員などのあいさつが行われている。行事が二つに分けて行われているのは現代的で興味深かった。セレモニーでは議員さんたちなどのあいさつの後、皆川さんが「稲沢市の杏和高校の高校生が来ている」と自分たちのことを紹介してくださりびっくりしたし、少し照れ臭かった。



【セレモニーが行われている矢田集落センター】 【神事が行われている八幡社】

神事が終わった後、八幡社から提灯を先頭に松明二本、ほら貝と太鼓が後を続く。鐘は使わずほら貝である。ほら貝の音が何とも言えなかった。ちょうど、セレモニーが終わったところに提灯が集落センターに到着し二つが合流し、いよいよ虫送りの開始である。



常滑の虫送りの特徴は、まず第一に実盛人形がないところにある。だから基本的には松明の行列である。サネモリ人形は、「オンカ送り」で用をすませたのか、この虫送りには参加しない。区長が持つ提灯二つを先頭に 120 本（今年は 127 本）の松明行列が続き、ほら貝・太鼓が最期をしめる。その後ろを消防団が消化しながら進むというものである。

第二にその規模の大きさにある。先ほど書いた通り、松明の本数は120本で祖父江の4倍である行列は、行程は集落センターを出て、橋を渡り、矢田川に沿って800m松明で行列を行う。800mだからだいたい15分ほどずっと歩くことなる。それが120本となると本当に勇壮である。

第三に伝統行事として神事として息づいていることである。ここ数年で作られた人為的な行事ではなく、以前からの形式を維持している。故にコースも川のほとりという、いまだ未舗装の少し広めの畦道に行く。だからこそ風情を感じずにはいられない。

「せっかく来たんだから一本持って」と松明を持たしてくれることになった。特に大きい一本を手渡された。議員さんなど来賓の中でもち虫送りに参加することになった。松明作成に参加していないのにも関わらず、快く松明を譲ってくださり、驚きと共に嬉しさがこみあげてきたのを今でも覚えている。渡された松明は思ったより軽かったが、長さはとても長いので後ろに倒れそうになった。

松明をもって列になって川の横を歩いている時、前で歩いていた昔から参加している地元の人が「松明は上下に揺らすとはげしく燃えるんだぞ。せっかくだから激しく燃やさないとな。」と松明を激しく燃やすコツを教えてください、持っている松明の火が消えてしまった時に「お前さんの火消えてまってるがな。御裾分けしたる。」と言って自分の松明の火を分けてくださいました。そしてその人の松明の火が消えてしまったときに「火わけましようか？」と聞くと地元の方は「ありがとさん。困ったときは助け合いやな。」と笑顔で教えてくださいました。この時になぜ常滑の虫送りが今でも形を残しているのかが少しわかった気がした。

それ以外のメンバーは、てできるだけ先頭のほうで様子を見た。最初にもうすごいものを発見した。スタート地点の松明に点火するための炎の中に人形のようなものを見つけた。地区役員らしき人に聞くと「そう、サネモリさんとフウフの鳥だよ」と教えてもらった。



【点火用の炎の中手らしいものが見える】

松明をつけた行列が、川に沿って延々と続く本当に美しい風景だ。ちょうど空は真っ暗で、松明の炎だけが延々と続く。最初の松明がゴールについたときやっとしんがりスタートするくらいなので800mにわたる光の帯が作られる。それが、闇夜に照らされ本当に美しい。



【川の沿いの畦道で行列スタート】



【延々と続く松明の光】



【一番大きな松明を持たせてもらった】



【ゴールのところでアイスが配られる】

ガードレールをうまく利用して火を弱めている大人の方の姿が何回か見られた。松明の扱い方がとてもうまいと感じた。すでに竹だけになっている人もいれば、松明の扱いに苦労している人も見られした。2本もちの人もいた。小学校高学年かなと思う子は、一人で松明を持っていた。私なら怖くて一人では持てません…。橋に向かって歩いているときに道のわきに2人のおばあさんが座っていた。松明を見守っている人が大勢いた。こんなに多くの人に知られている行事なんだと改めて思った。

見学している人たちのぼそっと呟いたことが耳に入った。その中に小さな子供がいて、「ママ見て、あんなに小さい子が持ってるよ」「あのおじちゃんの火なくなってるね」「とお母さんを困らせているようにも見えたけれど、僕もやりたいというように感じた。

全員が到着し、たいまつを燃やした後アイスクリームを頂いた。今まで暑かったのがウソのように涼しくなった。参加者全員に配られていて、幸せそうな表情で食べていた光景を今でも思い出せる。

最後に皆川さんにいろいろ話を聞いた。

「予定では30分で終わる予定だったけど、今日は風が強いから9時くらいまで続くかもしれない…昔はもっと多かったから切れ目がなかったからね」と。子どもがかぶっているヘルメットについて聞くと「強制はしていないよ。火の粉来るから結局多くの子が身近にある自転車のヘルメットになっちゃう…」と。子どもと親の組み合わせが多いことを聞くと「子供会だけで50本かな、子どもは持ちたくてしょうがないもので。日ごろから火遊びなんてやらしてもらえないんだから…」「松明づくりも楽しくわいわいやっているし」と。「だいたい大人だけで参加しているのは八幡神社の役員か地区の役員だけそれ以外はだいたい子連れか孫連れ」「孫と歩けるからじいちゃんたちがものすごく楽しみにしている」と笑いながら話をしてくれた。話はいつまでも尽きなかった。あっという間の出来事に感じるくらい楽しかった。お礼を言ってこの日の調査は終わった。

5) 調査を終えて

常滑の虫送りに参加して、一番感じたのは、人の多さも違ったが、その中で特に違ったのは年齢層だった。小学生とその保護者がたくさんいたことだ。親子や3世代で参加している方々も多く、脈脈と地域に根付き、つながっている歴史の縦のつながりがあると感じた。

子供が自分の松明を持てるということから喜んで準備から参加することで、その親や祖父母を巻き込む。子供が参加したいという意思が強いため必然的に大人の参加人数も増える仕組みが作られている。子どもを巻き込むことで次の世代にうまくバトンタッチでき、伝統がうまく引き継がれていると感じた。

祖父江でも子どもが主体になったほうが継続性が保たれる感じがした。松明に名前を付ける、一人一つが無理なら、3～4人でもいいが自分の松明という感覚を待たすことで、子供の参加やその保護者を松明作成から増やす必要性を感じた。

しかし、祖父江の虫送りは一度中断したこともあり、伝統として自然に引き継いでいくには難しい側面が多いことを痛感した。昔からの行事として継続している常滑と違って、祖父江では伝統を引く継ぐべき子供たちも自然と引き継いでいけるわけではない。意図的に巻き込むことで引き継いでもらう努力が必要である。

今回他地域を見ることで、特に感じたのは現在祖父江の虫送り実行員会で主体となっている人たちが熱い思いで伝統を作り、どうやって伝統を引きついでいくか模索されているのか。その地域に対する強い思いを感じることができた。

3. 情報発信活動

1) Twitter による情報発信

① 祖父江虫送り https://twitter.com/Mushiokuri_S

プロフィール

愛知県立杏和高等学校による、「祖父江町虫送り」の地域活性化応援アカウントです!! 3年生15人と愉快的な社会科教諭が活動しています。祖父江に伝わる伝統行事を知ってほしい、見てほしい、来てほしい!!!



② ツイートの様子

5月31日開設し前日まで断続的に行った。

開設から5週間でツイート数は100で、一日平均約2.5個のツイートになっている。開設はじめはあまり準備ができていなくツイートが少なかったが、最近4コマ漫画をツイートするなど多くのメンバーがそれぞれのかたちでかかわっている。ツイート内容もそれぞれの個性が出て面白い。特に順番を決めずにそれぞれがつぶやいた。

③ ツイート内容は

- 行事そのものを知ってもらうもの
- 昨年参加した時の感想
- 斎藤実盛について
- マンガ「さねもり君劇場」
- 祖父江の虫送り豆知識
- 雑感



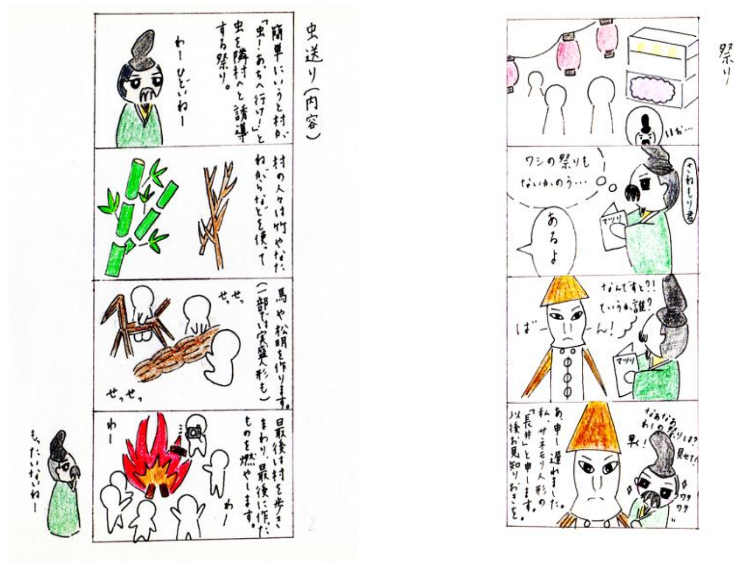
2) 「祖父江の虫送り」のチラシ作成

虫送りのチラシの作ろうということになった。本当は事前に配布したかったが、期末考査などが入りなかなか進まず直前に完成した。



3) 四コマ漫画「さねもり君劇場」

少しでも、虫送り、実盛を身近に感じてもらうために視覚的な効果を狙い4コマ漫画を作った。意外とシュールなできになり、親しみやすい仕上がりになった。



4) 新聞による報道

東海地方では圧倒的な購読率を誇る中日新聞が、私たちの情報発信を取り上げてくれた。虫送り2日前であったが、新聞掲載によって、いろいろな人から新聞で見たといわれるようになった。

「虫送り」ツイッター開設

稲沢市祖父江町で七日ある県無形民俗文化財の伝統行事「虫送り」をPRしようと、地元（兼野ひなた）の杏和高校の生徒が、ツイッターのアカウントを開設した。同校では五年前から虫送りの研究を続けている。イラストや写真を交え、歴史などを分かりやすく発信しており、当日はリアルタイムで、行事の様子を伝える予定。

稲沢杏和高生 7日、速報予定

虫送りは害虫を追い払って豊作を願う、各地で行われていた伝統行事。たいまつやわら人形を掲げ、鐘や太鼓を鳴らしながら行列を成し、田んぼ周辺を練り歩く。

農業の普及などで多くは廃れたが、町内の一部の地域では江戸時代から受け継がれ、一九八四年に県の指定を受けた。後継者不足などを理由に一度は途絶えたが、現在は地元の人々がとてつくる実行委が担っている。

杏和高では夏休みの課題研究の一環で、有志の生徒たちが文献を読み、地元住民への聞き取りを行うなどして理解を深め、行事にも参加している。本年度も水田地帯を練り歩く住民たち、2008年7月、稲沢市で




は総合的な学習の時間も活用し、三年生十四人が研究に参加。地域活性化にも協力できればと話し合い、ツイッターで発信するようになった。

アカウント名は「祖父江虫送り」(同名で検索)。五月二十日に開設し、昨年行事に参加した生徒の感想のほか、言い伝えや当日の流れなどを紹介する四コマ漫画を掲載し、随時更新している。

七日は午後一時から牧川小学校の体育館でわら人形やたいまつを作り、午後七時ごろから小学校近くの田んぼの周囲を歩く予定。ツイッターではその様子を写真などで配信するため、準備をしている。

実行委会長の海田幸男さん(左)は「昔ながらのやり方を受け継ごうと行事を続けているが、実行委では外部に向けて発信する体制が整っていないのでありがたい」と感謝する。

漫園を担当している立松真実さん(右)は「自分と同世代で虫送りにも関心のない世代にも読んでもらえるよう、ストーリーなどを工夫している」。

小学生のころから参加してきた地元の小栗坂さん(左)は「大人になっても行事が残っているよっ、自分たちが次の世代に伝える役割を果たしたい」と話す。

尾張版



岐阜城
前野 恒
中部一水会所属

ニュース、情報は下記へ
社 会 部
052-231-1650・5919
Eメール
shakai@chunichi.co.jp

一宮 郵局 千491-0851
一宮市大江1-13-13
0586-72-4545 Fax72-5035

津島通信局 0567-28-2157 Fax28-2158
稲沢通信局 0587-32-8800 Fax23-8035
江南通信局 0587-54-4001 Fax54-9622
龍江通信局 0567-95-3022 Fax95-3000
春日井支局 0568-81-2036 Fax81-2797
犬山通信局 0568-61-2612 Fax61-2613
小牧通信局 0568-72-1177 Fax72-6530

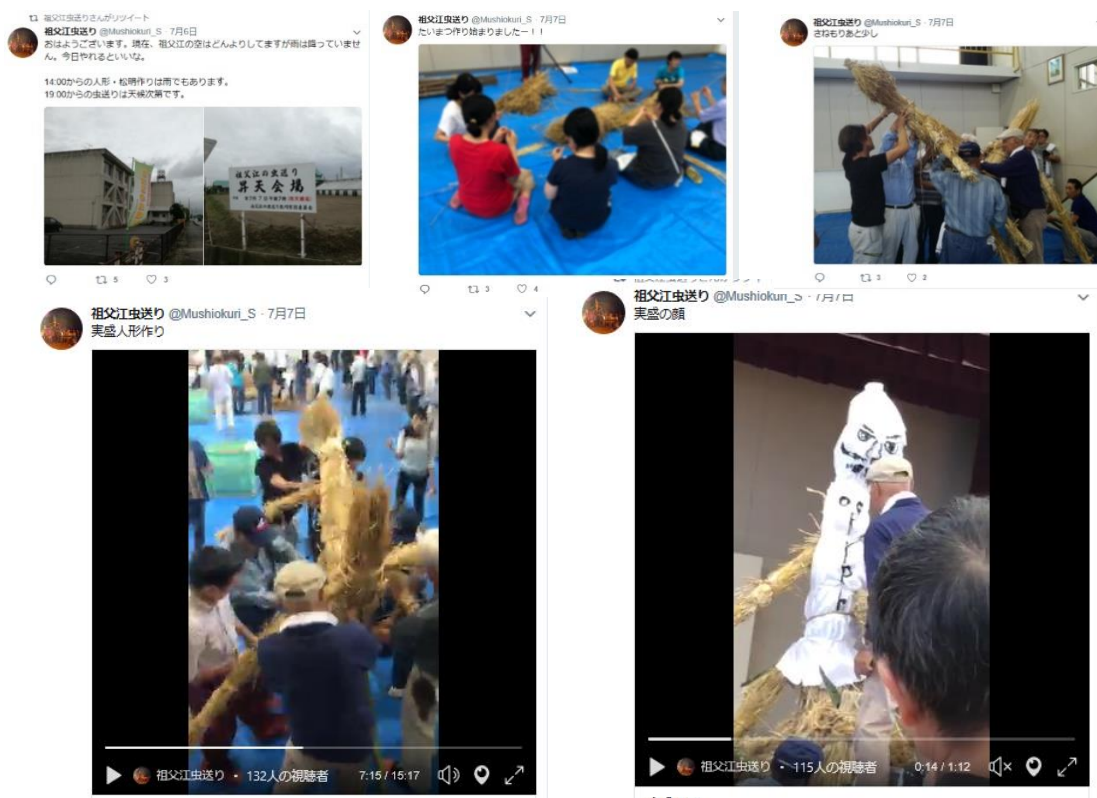
中日新聞へのご意見は
読者センターへ
052-221-0800 Fax221-0819
Eメール

新聞記事の中で祖父江の虫送り牧川実行委員長海田さんの「昔ながらのやり方を受け継ごうと行事を続けているが、実行員会では外部に向けて発信する体制が整っていないのでありがたい」とコメントがあっとうれしかった。

5) 当日のTwitterによるリアル発信

①人形・松明作り 7月7日(土)

朝、天気が不安なことをツイートした。午後になり作成が始まるとツイート始めた。写真を中心に様子を25ツイート、リアルな動画配信を7ツイートした。松明・人形の作成進度に合わせて行った。動画は動きの多いものを中心に行った。例えば、手綱の編み込み、顔の形作成、馬と実盛の合体、実盛人形の顔入れなどである。貴重な動画も配信できたと考えている。一方、プライバシーには配慮を心掛けた。撮影するときは、一言声をかけた。本当は小学生の子どもたちが一生懸命松明を作っている様子など貴重な写真も多かったがこれを配信するわけにはいかなかった。これは残念だが、インターネットというものを考えれば、仕方がなかった。この日の虫送り行列は、結局行われなかった。決定を聞いてすぐ延期されたことをツイートした。これをどれくらいの人が見たかは知らない。後日、ある先生が「知り合いが『虫送りの延期ツイッターで知ったよ』と言っていたよ」と聞いて少しうれしかった。ほんの少しかもしれないが役に立てたかもしれない。

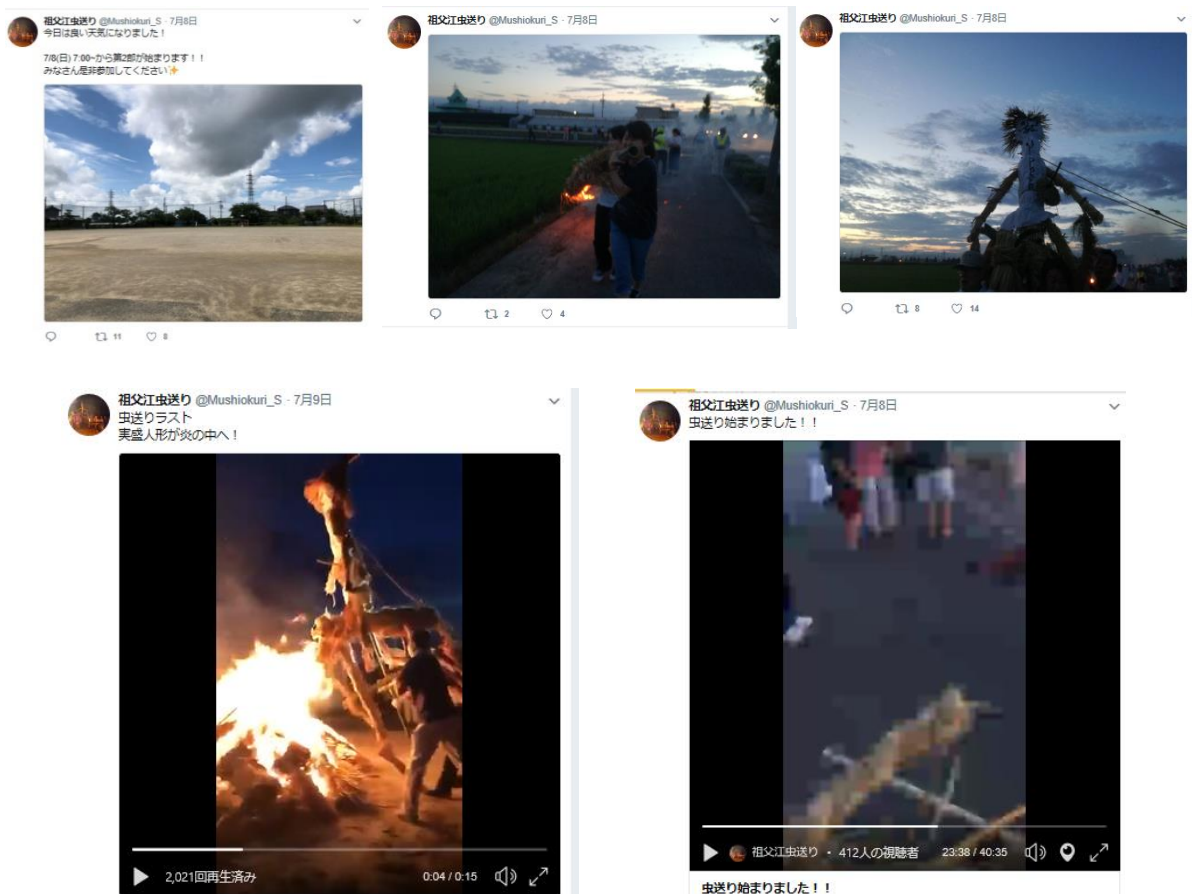


②虫送り当日 7月8日（延期でこの日に）

朝、今日は天気なのでやれそうだというツイートをした。夕方が近づき会場のようすを津一とした後、実際に開始とともにツイートをした。動画は開始と同時にリアル配信をやり続けた。画像は20ほどリアルにツイートした。

虫送り行列では、前日の作成中と違い、撮影の許可を取りにくいので、前日以上に写真に気を使った。もっと、楽しいそうな表情を取りたかったが、自分たち以外はあきらめた。これも仕方がなかった。

後日友人から家で見えたよとも言われた。実盛が昇天する動画には、多くのリツイートや「いいね」がされ、拡散できたことが証明できた。





地元の中日新聞と読売新聞で取り上げられ、この新聞を読んだから冊子を分けて欲しいという連絡も複数あった。これも少しは地域貢献ができたのではないかと考えている。

キーワードで知る虫送り

稲沢 杏和高生が冊子



①冊子「祖父江の虫送りA to Z」をPRする伊藤さんと木村さん＝稲沢市祖父江町の杏和高で ②今年の虫送りの様子＝稲沢市提供



稲沢市祖父江町で行われる県無形民俗文化財の伝統行事「虫送り」をPRしようと、地元の杏和高校の生徒が、その魅力を紹介する冊子「祖父江の虫送り A to Z」を作った。同校では五年前から虫送りの歴史や文化を調べたり、毎年七月に催される行事に参加したりして研究を続けている。生徒たちは「伝統を受け継いでいくため、若い世代に手に取ってもらいたい」と願っている。

(秦野ひなた)

虫送りは、稲に被害をもたらす害虫を火や煙で追い払って豊作を願う行事。たいまつやわら人形を掲げ、かねや太鼓を鳴らしながら田んぼ付近を練り歩く。全国各地で行われていたというが、農業の普及で多くは廃れた。祖父江町内の一部地域では江戸時代から受け継がれ、後継者不足などで二〇〇〇年代半ばに一時、途絶えたが、現在は地元住民らでつくる実行委が担っている。

冊子作りに取り組んだ三年の伊藤響さん(も)は「昔の人の考えに触れられる貴重な機会で、後世に残していきたい。まずは学校の後輩たちに読んでもらい、足を運んでみてほしい」とPR。三年の木村美穂さん(も)は「わら人形やたいまつを作ったり、担いだりするのも人手が必要。伝統を途絶えさせないためにも、地元の中学生などに参加してもらいたい」と話した。

冊子は五百部作成し、一部を市に寄付した。残りは、来年の虫送り行事で配ったり、公共施設に置いたりすることを検討している。

にも伝えていこうと、同校の一三年生の生徒と担当教諭の計十七人が取り組んだ。冊子はCDケースサイズで、二十四ページ。目次には「A」から「Z」までの二十六の頭文字から始まる虫送りに関連する単語をピックアップ。その単語ごとに写真を交えながら、行事の内容や歴史、虫送りに参加した体験談を記している。

【中日新聞 2018/10/5】

虫送り冊子で発信

稲の害虫を追い払い豊作を祈願する稲沢市祖父江町の「尾張の虫送り行事」(県無形民俗文化財)を広く知ってもらおうと、地元の県立杏和高校の生徒たちが、小冊子「祖父江の虫送り A to Z」を作成した。生徒らはツイッターでも準備の様子や当日の様態を発信。地域の伝統行事の魅力在全国に伝えたいと意気込んでいる。

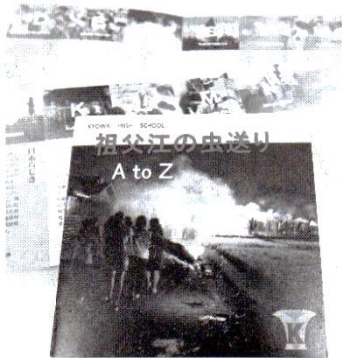
(沢村宣樹)



●作成した冊子を手元に「伝統を守っていききたい」と願う県立杏和高校の生徒ら(左)生徒らが作成した「祖父江の虫送り A to Z」

杏和高生

祖父江の伝統 全国へ



虫送りは7月10日前後に行われる、稲に害をもたらす害虫を追い払って豊作を願う儀礼。たいまつや鉦、太鼓などを持った人が行列になり、田んぼのあぜ道などを練り歩いて、害虫をまぢの外へ追いやる。無形民俗文化財に指定されているのは同町島本新田の行事で、後継者不足で2005年に一度途絶えたが、有志の尽力で翌年復活した。

同校からは、地元の伝統行事に触れることを目的に、有志が14年から参加。総合学習の時間に文献を読んだり、住民に話を聞いた

ツイッターで「生中継」も

ツイッターで「生中継」も
りして理解を深め、行事の特徴である大きなわら人形やたいまつ作りにも加わってきた。今年は行事を広く知ってもらおうと、準備の様子もツイッターで発信

し、生徒約20人が参加した当日の様態も「生中継」。ツイッターを見た民俗学専攻の大学院生が茨城県から当日、見に来てくれるなど、手応えもあった。

同校の活動報告は今夏、福知山公立大学(京都府)が行う地域活性化策コンテストで佳作に入选。同大教員から行事の魅力を伝える冊子作りを勧められ、7月から取り組んできた。

冊子は12センチ四方の大きさでカラー14ページ。「dynamis

「(タイナミック)」、「(Font) (クラウド)」などAからZで始まる単語に寄せて、生徒らが「燃える炎とともに人々の心も燃え上がる」、「大地がすすごい、米や野菜が育つんだから」などと行事の情景や自然への思いをつづり、自分たちで撮った写真もふんだんに使った。平安時代末期の武將が由来とされるわら人形の成り立ちを描いた漫画も掲載。イベントなどで配られる予定だ。

行事の準備から関わってきた3年木村美穂さん(17)は「たいまつや人形作りを通して、お年寄りから絶対にはびけたいひもの結び方など昔の知恵を教わった。地元の人と楽しく交流できる貴重な機会だった」と振り返り、伊藤響さん(17)は「私たちの取り組みで行事に関心を持ってくれる人が増え、地域が元気になるはず」と話していた。

Ⅱ部

2019年度5月からの活動

1 他の虫送りの調査

1) 三重県熊野の虫送りの調査

調査日：2019年6月8日

地域：熊野市丸山千枚田

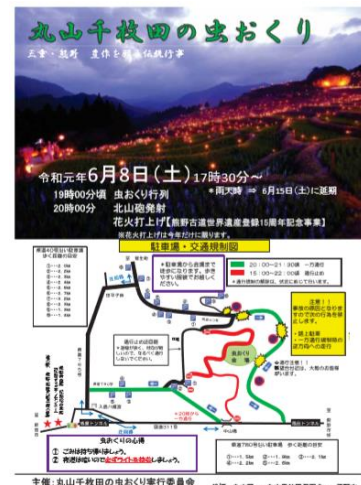
参加者：提灯を購入した人々

中心：丸山千枚田の虫送り実行会

行事内容：虫送り行列

北山砲発射

花火打ち上げ（熊野世界遺産登録15周年記念事業）



【虫送りのチラシ】

2) この調査地を選んだ理由

昨年、尾張のもう一つ常滑市矢田地区の虫送りを調査し、祖父江の虫送りと比較した。今年は、もっと違うところを調査しようとしていた時に、世界遺産で有名な三重県熊野市で虫送りが行われていることを先生に教えてもらった。

毎年、新聞やニュースで取りあげられ有名な虫送りと比較することで、祖父江の虫送りのことを深く考えることが出来ると考えた。少し遠い所だったので行くのが大変だったが調査に行くことにした。調査に当たって、先生の知り合いだった熊野市議員の久保智さんに案内してもらった。

3) 当日の様子

熊野市丸山千枚田の虫送りは1953年に途絶えたが、熊野古道が世界遺産に登録された2004年に、再び行われるようになった。

丸山千枚田は熊野市観光公社のホームページよれば

「慶長6年(1601)には2,240枚あったと記録されていますが、平成5年には約530枚まで減ってしまいました。しかし、この貴重な資源と伝統的な農耕文化を保護し後世に伝えていくことが極めて重要と考え、地元住民と紀和町(現熊野市)が一体となり平成5年より復元を開始しました。平成8年には1,340枚まで復活し、訪れる人に感動を与えています。」と説明がある。



初めてみる棚田にはすごく感動した。教科書でしか棚田をみたことがなかったが、実際に昔の人が、生活のためにあんな斜面を掘り、田をつくったということ事実に驚きを感じた。さらに1つの田が止まると他の田も止まってしまうということを知り、地域全体の協力が不可欠であることを知った。さらに1つ1つの田が小さいため手植えでとても手間がかかるということについても今回実際に見て初めて感じる事ができた。

私たちが丸山千枚田に到着すると、すでに大勢の人がいて驚いた。年配の方たちだけでなく家族連れの人も多かった。中でも目立ったのが、カメラの三脚を置いて場所取りをしている人だ。少し離れた山の上からもフラッシュの光が見えた。田んぼのオーナーをやっている人も結構来ているという。



18:30 頃から、棚田におかれたキャンドルに火がともされた。全部で 1340 個。ちょうどその数は現在の丸山千枚田の数と一致するらしい。

【火がともされた棚田】

虫送りのスタート地点丸山神社の前にはたくさんの方が集まり、虫送りが始まるのをまっている。その場でかけ声の練習が行われ、子どもたちの大きな声が山に響く。

行列に参加する人が手に持っている提灯は、1つ1000円で販売されているもの。これを購入した者が虫送りに参加できる。「立夏大吉」「鎮防火燭」と書かれた御札と一緒にもらうことができる。



【購入した提灯】



【御札】

午後 19:00 から虫送りの行列がスタートする。松明は 3 本、鐘や太鼓を鳴らし、みんなそれぞれ提灯を手に持ち、「虫送り殿のお通りだい」と掛け声を上げて、千枚田のあぜ道を進んでいく。

参加している人の多くは子どもたちとその保護者だ。子どもたちの元気のいい声が谷間に響いていた。松明は大きなものではない。急いで私達は、行列に参加した人の数を手に持ったカウンターで調べてみた。222人であった。まだ、薄明かりの残る中、虫送りの行列は続く、人々の提灯の明かりは小さく弱いために、あまり光らない。まだ薄暮のためにあまり見栄えのしない状態だった。



【222人が参加していた】



【松明3本、それも簡素なもの】



【虫送り行列の先頭： 竹に刺したお札や小さな太鼓、松明が見える】



【薄暮の中を進む】



【細い畦を進んでいく】



【夜空とのコントラスト】

虫送りを行っている中心の一人である丸山千枚田保存会会長の喜田俊生（72歳）さんに話を聞くことが出来た。「それまではこの住人の人が、実際松明と太鼓・鐘と大きな掛け声で虫を松明に寄せて、村はずれまでもっていった。」という。その後虫送りが行われなくなったのは「虫を連れていく必要がなくなったから。農薬があり、科学的に虫を殺すじゃない。それで虫を連れていく必要がなくなった。」と。



現在行っている虫送りは「…昔の行事をちゃんと再現をしたいということで、始まったのがこの行事です。だから今は松明をたたいて掛け声と一緒に、昔一番外れまで行ったようなコース、道をたどって、お寺で祈祷してもらったお札を持ってそこに置いてくるという行事に変わった。」と、また「ただ昔実際苦勞してやっていたことをどこかで引き継いでいきたいという思いがある。」という思いも教えてもらった。

現在の虫送りで使う松明は3本。それを道の途中で交換していく、その他行列に参加している人はみな提灯を持つ。薄暮の中を進んで御札を置いてくる。

はたして、これが昔の行事の復活であるといえるのだろうか。千枚田を照らす1340本の火もつい最近のものだ。昔はもっと松明も多く大掛かりなものだったのだろう。

行列に参加したのは222人。しかし、丸山千枚田を訪れた人はおよそ800~1000人ほど。それを考えれば、虫送りの行列に実際に参加する人は、全体の4分の1もないことがわかる。虫送りを含めたイベントの規模自体は大きいですが、花火や景色の写真を撮るのがメインになっているという印象を受けた。もともとは害虫駆除のために行われていたが、現在では観光客向けのものという感じが強かった。松明はたった3本。提灯の光はあまり輝くわけではない。虫送りだけを単体で見るとずいぶん寂しい行事に感じた。

虫送りの行列が終わり、徐々に闇夜につつまれ、棚田のキャンドルライトが一面光り輝くようになったころ、20:00 から北山砲や熊野古道世界遺産登録十五周年の花火の打ち上げがあり、会場全体はクライマックスを迎えた。



【北山砲から火花が発射される】



【昼間見た北山砲】



【最後は花火で終わる】

4) 調査を終えて

熊野の虫送りと祖父江の虫送りを比べてみると、熊野は「観光客向け」、祖父江は「伝統の保存」という大きな差があると感じた。熊野の虫送りの提灯やキャンドルライトなどはつい最近のものという感じが強い。虫送りを再び始めた当初は、地元の人ほとんど参加していなかったようだ。完全にイベントの運営が外部化されている。

それに対して、祖父江の虫送りは地元の小・中学校、高校、地域住民が行事を支えている。これはとても大きな違いだと感じた。熊野の虫送りは松明の数が少ない。祖父江の虫送りの松明と比べると、とても小さく感じた。掛け声があるという点でも祖父江とは違う。「虫送り殿のお通りだい」という謎の掛け声。これは熊野の虫送りが、もともと地域の子どもたちが集まって行っていた時の名残なのだろうか。よくわからない。

ネットや新聞には伝統行事の復活などと書かれているが本当にそう言っているのだろうかというのが率直な感想だ。

ただ、熊野の虫送りは、これはこれでいいのかもしれない。過疎化が進む地域では高齢者が増え、町おこしができなくなってしまいよりいっそう過疎化を促進している現状なのに対し、こうして観光資源を作り、他地域の若い人材の協力のもとで、町おこしをしていくのは現代の社会変化に伴っており本来の目的とは変わっているとしても、そういった形で伝統が受け継がれていることも素晴らしいことだと思いました。実際、イベントとしては大成功である。毎年、たくさんの方が訪れているし、きれいな景色がツイッターやインスタグラムに上がることによって、多くの方が千枚田のことを知り、また人が集まる。地元経済も潤う。このようなことはやりたいと思ってできるものではない。

一方で、「祖父江の虫送り」は虫送りという行事で見たところ、有名な熊野の虫送りに決して負けていない。いやむしろはるかに優れて、胸を張って誇れる行事であることが認識できた。これが分かっただけでも、今回調査したことは本当に良かった。熊野の虫送りがあれほど騒がれるなら、「祖父江の虫送り」はやり方次第でもっともっと魅力を発信できることを肌で感じる事が出来た。

5) 丸山千枚田保存会会長 喜田 俊生さんからの聞き取り全文

虫送りというのはいつからいつまでやっていたんですか

やり始めたのはよくわからないんですけど終わったのは昭和28年。生まれてないよね。

生まれてないです

そうだね。僕が5歳の時やから。それまではこの住人の人が、実際松明と太鼓・鐘と大きな掛け声で虫を松明に寄せて、村はずれまでもっていった。これが虫送りの行事だった。その今はなぜやらなくなったかという虫を連れていく必要がなくなったから。農薬があり、科学的に虫を殺すじゃない。それで虫を連れていく必要がなくなった。ただいまもう何回目だろう。昔の行事をちゃんと再現をしたいということで、



【虫送り出発地点の喜多さん】

始まったのがこの行事です。だから今は松明をたたいで行ったようなコース、道をたどって、お寺で祈祷してもらったお札を持ってそこに置いてくるという行事に変わった。だから本来は松明に虫を引き寄せていくんだけど、今は行列してセレモニーになってしまった。だって今虫がないんだもん。もともとね、虫が発生するのはだいたい7月から8月この時に稲の実にカメムシとかウンカとか病気を運ぶ虫をみな連れて行った。それが始まり。今各地区で虫送ってやってますね。三重県でも紀北町とかああいうとこでこの前あったのかな。小学生や一般の人たちが行列してやっていた。丸山では三大イベントの一つが虫送り。田植え、稲刈り、虫送り。この三つがだいたい1000人ちかくの人を集めて行事をやろう・・・。

つまり参加型なんですね

そう。だから若い人いるじゃないですか。自分たちのようにね。そういうのを狙っている。年寄りたちは若い人のエキスを吸い取ろうと。そういうのが狙い。虫を連れてくるんじゃなくて人を連れてくる。(笑)それが本来の狙い。僕らのね

何人ぐらい集まるんですか

今日はね新聞発表まだわからないんですけど。一応1000人くらいは来るとみてるんですけど。

え～すごーい

昨日まで天気悪かったじゃない。それで少し出足わるいかな。ひそかに少ないかなとちょっと思っていたけど。テントの前に結構集まってきたので、まあ少なくとも800は来るかな

え～すごいな～

人口密度がこれで800くらいになるのか。(笑) 普段30人とかそんなもんですから。

最初復活させたときは何人ぐらいでやってたんですか？

いやあのときはね、僕もよく記憶ないんだけど、それでもやるって言うて5・600。結構集まっていた。だから、これは今実行委員長やってくれてる新谷進っていうんだけど。これがねいろいろなところに顔が利く人で「やるからよって」というと結構人が集まる。多分次の実行委員長変わったとたんちょっと減るかもしれない。今の実行委員長についている人脈でそうとうな人数呼んでる。というのもある。

丸山千枚田にかかわっている人が多いんですか

そうですね。今日もちろちら見えているんですけどオーナーさん結構来てるんです。愛知県とか。もう日ごろからここにきてくれる都会の人。特に三大イベントじゃなくて、草刈りボランティアやりたいとか言うて来てる方、さっきも見受けられたので、ここをあの一景色はいいんで、それだけじゃないんだけど、保存会長の人柄にもよるんですけど(笑)。あの来てくれて、気さくに話してくれる。それからね、今まで地元の人あまりよらなかったんだけどここ3年くらい前からね相当地元の人に来てくれる。特にその一あの一熊野古道の世界遺産登録から今年15年なんだけど、10年目の時に花火やったの、その前にもちょっとやったんだけど、花火というのに集まる人。結構いるんだよね。そこにずーとカメラ並んでいるんだけど、ほとんど花火なんだ。千枚田どうでもいい。こんなのは。山谷に映る花火に絵を撮りたいと言うて結構集まる。ただカメラマン同士の集まりはすごく人を寄せてくる。だいたい都市からきている。それも一つの宣伝なんですね。この田植えの後の夕日を撮りに来る人たちが「虫送りあるよ」と言うて、今日はいつものそうね10倍くらいは来ている、もっと来てるかもしれない。カメラマン、そう高級カメラずらーと並んで、みんな売っちゃたらいいね(笑) そうとう入るよね。

実行委員会は今何人ぐらいでやっているんですか

実行員会の役員が10人くらいかな。

おいくつくらいの方がやっているんですか

聞きたい？若い方がいい？(笑) あの一実行委員長がだいたい60くらいだからそれから僕が7つ上だから。事務局が若いだよね。役場の職員がだいたい40台、若くても40。君らより倍くらい違うか。お父さんくらい。そういう年代だと考えてくれればいい。お父さんが言うようなことを言うわけだ。勉強せよとか

虫送りが復活したのは2007年、2004年でしたっけ？

間違いない。世界遺産登録の年。

そうですね。復活させるまでにはどんな経緯があったんですか

これがねほとんどわからない。これは新谷実行委員長に聞くのが一番いい。僕は10年前から参加しているからそれまでのいきさつはよくわからない。僕はこっちに来てから11年目。もともとこの山の中じゃなくて、熊野市の大都会にいたから（笑）大都会（笑）海岸部にいたので。虫送りが今けっこう全国でテレビなんか放映されているのを見ると、みんなこうイベントタイプ。虫送りって実際虫を追い払う必要なくなっている。これはもう間違いない。ただ昔実際苦労してやっていたことをどこかで引き継いでいきたいという思いがある。それからこの地区というのは日頃あんまり人が集まらない。例えば、熊野市のなんて言うのかな、地域復興のために、都会の人との交流は必要だから、呼んで、呼べたら呼ぶ。地域にお金を落としてもらおう。都市というのはなんぼでもお金を落とすところがあるんだけど、田舎にはないんだよね。こういうことをやることによって田舎にお金を落としてもらおう。そういうのが大きな目的かも知れない。後は久保先生（私達を案内してくれていた熊野市議員さん）にもう少し聞けばいいかもしれない。

ありがとうございました。

2 今年の情報宣伝活動

1) ここまでの活動

今年も SNS による宣言活動を行っている。新たにアカウントをとることも考えたが、昨年のアカウント引き継ぐ方が、宣伝効果が強いと考え、写真等を入れ替え継続している。先輩たちも虫送りのツイッターが再開されたことを喜んでくれた。

Twitter ホーム モーメント キーワード検索 アカウントをお持ちの場合 ログイン

184 ツイート 195 フォロワー 128 フォロワー 42 いいね

祖父江虫送り
@Mushiokuri_S

愛知県立吉和高等学校による、「祖父江町虫送り」の地域活性化応援アカウントです!! 去年の3年生のアカウントを受け継いで今年も3年生で活動しています。祖父江に伝わる伝統行事を知ってほしい、見てほしい、来てほしい!!!

◎ 愛知県 稲沢市 祖父江町
📅 2018年5月に登録

固定されたツイート

★ **祖父江虫送り** @Mushiokuri_S - 5月20日
今年度の祖父江虫送りの日時は7月6日、愛知県稲沢市立牧川小学校でやります。情報が入ったらまたツイートします!!

🗨️ 13 🍷 25

祖父江虫送り @Mushiokuri_S - 12時間
虫送りAtoZ 📷 Q
quaint 非日常

Twitterを使ってみよう
登録してあなただけのタイムラインを作りましょう
アカウント作成

世界のトレンド
津波注意報
山形県・新潟県・石川県に津波注意報 震度6の地震 気象庁

祖父江の虫送りの日程や簡単な感想と昨年先輩たちが中心となって作成した「祖父江の虫送り AtoZ」を中心にツイートしている。



前日まで、SNS によって宣伝活動を続ける予定である。

2) 当日の宣伝活動の予定

① 昨年作った「ATOZ」を当日配布。

現時点で虫送りの魅力をきちんと伝え事が出来る小冊子であると考えている。
保存用の数冊を残して当日に配る予定である。

② 当日リアルタイムにツイッターで情報活動を行う

外部に向けて、実盛人形、松明の作成の様子。夕方から始まる虫送りの行列を、SNS を利用してリアルタイムにその魅力を発信する予定である。

現在効果的な情報発信のために、役割分担などを話し合っている。

まとめにかえて

今年も祖父江の虫送りが7月6日に行われる。江戸時代から続くこの行事を大切にしたいと考えている。

昨年は虫送りに参加し伝統行事を楽しむと同時に情報活動を外に向けて行った。その中で地域活性化を考えているうちに“地域”と“外部”と”世代を越えて”多くのつながりと自体の大切さを強く感じた。また、常滑の虫送りと比較することで祖父江の虫送りを相対化した。今後の継続のためには工夫が必要であることを感じただけでなく、担い手の方が必死に頑張っているからこそ、今があることを痛感することができた。

今年は、祖父江の虫送りの前に、「熊野市丸山千枚田の虫送り」を調査することができた。全国ニュースで取り上げられる有名なもの。実際、翌日ほとんどの新聞がカラー写真付き記事で扱っていた。集まる観客も1000人を越える。それも全国から観光客が集まってくるこの行事、さぞかし素晴らしく勇壮な行事だろうと期待して調査に入った。

結論からいうと「虫送り」という行事だけで考えるとちょっと期待外れだった。確かに千枚田そのものが美しい上に、棚田一つ一つがキャンドル飾られ幻想的な風景が広がる。夜空に、北山砲から放たれる火花や、谷間にあがる花火が夜空を照らす。音は山々に響き渡る。全てをひっくるめてた行事としては圧巻だった。丸山千枚田保存会長の喜田さんが認めるように、キャンドルで照らされた棚田の風景や花火や放たれた北山砲を見るために多くの人が来ている。虫送りという行事は人を集めるための手段として使われているにすぎないという印象を受けた。

一方、「祖父江の虫送り」は巨大な松明一つ一つを手作りで時間をかけて作り、それを地域の子どもや地域の人々が抱えて行列を行う。鐘や太鼓も本当に本格的なもの。江戸時代と同じ形を現代に残そうと地域が本当に努力をしている。クライマックスで、実盛人形を昇天させるシーンは本当に荘厳である。虫送りという行事で考えた時、あの有名な「熊野の虫送り」と比較してもひけをとらないどころか、数倍勝っているもの、まさに地域の誇りだと断言が出来るものだということが分かった。まさに目からうろこである。

確かに大きな扱いを受け観光客が来れば地域が一時的に活性化するかもしれない。でもそれがどんな素敵な行事でも、どんなすばらしい特産品を作り出したとしても、もし、地域の人がそれに誇りを持たなかったら効果は薄れてしまう。地域活性化でまずは大切なのは、そこに住んでいる人がその地域に、その地域の行事に誇りを持ち、愛することだと思う。

私たちは、今回の調査を通して「祖父江の虫送り」がいかに素晴らしいもので、全国のどこに紹介しても恥ずかしくない、地域の誇りになるものだと確信できるようになった。もしかしたら、地域の人はこのことに気付いていないのではないだろうか？

地域どころか、担い手としてこの行事を中心的に行っている方々もそこまで感じていないのではないか、そんな思いを強くした。これを伝えるのも私達の役割かも知れない。この行事は魅力が一杯だし、観光的にも十分に将来性もあると感じた。

今の時点で、高校生の私たちにできることは何か？

第一に、昨年と同じように外部に向けて、情報宣伝活動を続けていく。

第二に、当日、実盛人形、松明作りに集まった地域の人としゃべりながら、この虫送りがどれほど、貴重で素晴らしいものであるかという私たちの思いを伝える。

第三に、この貴重な「祖父江の虫送り」を引き継ぐために、私たち自身が担い手の一人として、行事を心から楽しみ、この素晴らしい文化を、そして地域を引き継いでいくこと。実はこれが一番大切なのではないだろうか。

今年の虫送りには杏和高校生として、過去最大の25人ほどが参加する。先生に聞くと参加を始めた6年前は8人ほどだったそうだ。毎年参加者が増え続け、いまでは行事存続のためには、欠くことのできない存在にまでなっている。今回は、今までかかわってきた多くの卒業生の先輩も参加する。この虫送りのために大学の下宿先から、わざわざ帰省し参加する先輩もいるということも聞いている。先輩達と加えるとゆうに30人を超すことになる。確実につながりは増えている。それほど私たちにとっても大切な行事になっている。

地域活性化は遠い所にあるのではない。何か難しいことすることにあるわけではない。地域にかかわる人が、地域のことを愛し、地域のこと考え、地域に誇りをもち活動するところにあるのではないか。高校生の私たちが出来ることは限られている。微力かもしれないが、「祖父江の虫送り」を通して、この素晴らしい地域を、そして文化を引き継ぎ発展させていきたいと考えている。